



全国ルーエッセー

埼玉県

今から約三年前、私は大滝村の一人診療所所長として赴任しました。大滝村が市町村合併で秩父市になる一年前のことです。隣村にある鉄道の最終駅で事務の方が迎えに来てくださり、さらにそこから山道を進みました。

途中、「どこからが大滝村ですか」と尋ねると、「民家が無くなった辺りからです」と教えてもらったのを覚えています。道の脇にはサルが出迎えてくれ、「ここは本当に埼玉県なのか」と思いつつ、私の二年間の診療所勤務が始まりました。

限られた機器で

大学を卒業後、将来困らないようにと救急医学を中心に学び、少しは自信を持って赴任し

せきい
関井

はじめ
肇

22期生、1999年卒

2年間で最後の往診先で、涙ぐみ別れを惜しんでくれた患者さんと



秩父市大滝国保診療所

【私の勤務地】埼玉県の西の端に大滝村はあり、村全体が秩父多摩甲斐国立公園に指定されていた。2005年4月1日、大滝村は秩父市、吉田町、荒川村と合併。その式典で、長く勤めた役場の人の中には涙を流している人も多かった。私もそこに一村民として参加した。

まさに人に人を診る医療現場

たつもりでした。しかし、一人診療所での経験は独特のものがありました。

めまいがするという患者さん
の自宅へ往診に行ったとき、自
分では99%大丈夫のはずと思っ
ていても、万が一の不安のため
に、ゆっくり寝られないことも
ありました。

圧迫しても止まらない出血をアルコールランプで熱したゾンデ(金属の棒)で焼いて止血したこともありました。限られた機器や医療資源で、自分の力と頭で判断して行動することは、都会の大病院では経験できないことでした。

地域の人はとても親切で、お茶の季節にはお茶が、イモの季節にはイモが届き、「先生一人で村に来てちゃんと食べてるかい」と声を掛けてくれました。寒冷地に慣れない私が官舎の水道管を凍らせてしまったときは、近隣の人たちが給出で業務用のポイラーを借りてきて助けてくれました。

それに心えるべく自分なりに頑張って診療し、二年間の勤務を終えたときには、皆さんと記念撮影をし、それをはがきにして送りました。名前や声を聞けばどこに住むどんな患者さんかカルテを見直さなくてもすぐに

分かる…。まさに人を診る医療現場でした。

適切なバランス

その後、一転して大病院の救命救急センターに赴任しました。事故で損傷のひどい患者さん、意識のない患者さんがほとんどで、そこはまさに壊れた体をいかに早く治すかという修羅場でした。

かかりつけ医の往診の下、自宅で自然な最後を迎えられる地域の患者さん。救命センターに運ばれたからこそ助かった事故の患者さん。慢性疾患を抱えた高齢者同士で今後の暮らしに悩む地域の患者さん。あらゆる手を尽くし、命は助かったものの植物状態になった救命センターの患者さん。いまだに適切なバランスを取ることに苦悩していますが、自分がかかりたいと思う医者になりたいと、努力を続けているつもりです。

(次回予定は千葉県)

※関井医師は現在、さいたま赤十字病院救命救急センターに勤務しています。